



郭司卷五

13
2942
2



へ13
2942
2

特

昭和九年
七月九日
博末

ふらう ふらう 兩個女兒 花笠初編卷之中

江戸

松亭金水編次

第三回 過去の説話



あゝ小武彦むすしんの必興ひきんの郡ぐん。碓川すいがわの片侍かたざむらい。猪俣平次ぶまへいじと
いふ人あり。また息田いせ家の郎らう等らうらうあり。五十石ごじゅういしをりて領りやうし。
富とみもあつねと貪あまらしうとぞ入いるもしく小世よ成なり送おくる妻つま
のふ邑むらと二人ふにんが中なかつふ。兩個ふたごの女兒むすめと持もつらう。姉あねの阿あ
千代ちよハ十七しち才さい。妹いもうと阿あ浅あハ十五じふご才さい。今いまも考からぬ眉まゆ目め容よう

三二

して宅をきく。ひよつと親父の片名でもあつて居るさ
るが里と尋ねて見てもさうさう分らん。只利ても片
言のうさへあつちとりのみなり。よかりとあるさうさ
何と指子に紛さるまい。まわりの者ゆりの様見さる。世も
いらぬあつちの位ふまでよきと伴し。さうさ
こけで搦ちやう。よしくさるよ同業さう。殊にうさる女の思
定あゆお海へ二葉の小見。まことさうさ連て仕て。世は
るさやとわでいさうて見ても不便さう。その日へ約も

止しして。之里の路を測くと負くゆつて潭家ゆも。さ
年嵩るさう姉とよびお海を妹といひるさう。育て
あげさうの月。殊の思ふに遙ふまさう。女のよきさ
何一。私さうぬおぬが。後明後ゆさあをよい見とお
近所の人は鬼やかかと。懐らさうさびよこの親父が。マ
どの中うさうさうさう。自由さうさうさうのさあ。おぬ
を居て婿をとる。後をゆ譲りさうさう。まじら先
刻ゆさう。接木の花の陰さうさ。おれゆさうさう

よう。政目がるけき上へも海をさうらち小春子すれど。
 今りのまりのおねがのうへ。おねはよろけてはあへ。お海へ
 僕らうや世もよまらぬ。先祖も不孝ふある。死を
 志すむい何ゆまよ。姉を因妹へ婚をとる。親のむあやしの
 仕うちと名いさうと。いひくもいおねのま性委う
 りくくまきのや。かるくむ免くも中る。その換りこの親
 父が。おねいあ、ふも務つこへく縁づけて中る。ぞいト娘
 終を夢て抱せまう。堰る。田を袖ふらけ。替時頼も

ろういしう。中末のて良とあげ。一使てもどふか。縁りと
 おのいさぬは男のま性。おんのるでございすせうね。平
 ろんの履言のとあねを編して。何がきて面白うら。
 とうる証拠もあふあるト。いひつとうあまを養深くる。
 守其の中意引不どいて。縁の徳包某の年某の月延
 生。東金町と書てあるを。書てあるを。書てあるを。書てあるを。
 比あまの茶令丁と。いひ何処中う一向あむ。人中の向
 へど知う人か。いひさうきひべと総のほる茶令とりい

不がある。と拵て使てゆなや一昔の余もさきまづら
わるも。ちやくと拵てかくが。おれが実の親いあの人
モ、息女で縁さへあるや。あつとぬとらふりゆあけきど。
枝の拵目へらしておく不ど。どうで故々ゆや辰もせきん。
受が果敢るい牙のう人と。あつであらうがあの親父が目の
悪いうちの六丈夫。今身でのみり味の親ふと。あつめて
辰中と下との一付。きけは受とて殺さうは辰とさあする
牙の果敢るさ。産の親さへ拵このを。捨つてとき年

月を育すまことる。精恩い七生の世城換るとも。報ある
ときのおつめや。とあつてらうとさむぐさ。何と親も
やうとく深。洞ふ神や志あつらうん

第四回 弱官の裸言

かゝる所へ是程が。是かみくくと強きさう「徳僕さる中」
あげすん。意の法利でひあうすんト使より平次い立
いでくマア大義く。名の法利の越きん「ハ法利のすん
ぞんトすせ縁ど。お徳より意のお辰。あつとさるは出

仕ある中へ申入まんと重役元の係をうけて来す。こ
 出若勞るがう今まぐふ、いづふ中承承仕る。越さる出
 仕いしせせうと。を申う傳りて申あげい。や。こまか子代
 と下大いを申う物して下まさせ。か平代に策筭あ
 かけて出仕の支えて着衣を。かけて袴の係をあてま
 提およ。扇子よと。まて。杖へい。まあがり。預る。母も
 であらう。淋。うらうが。おりの。名。前。さし。て。おと。と。おふ
 代。い。い。つ。け。端。て。出。て。申。お。ふ。代。い。父。を。え。か。う。て。

元の。あ。へ。ち。か。う。つ。ま。ま。む。か。へ。寝。る。や。そ。ん。る。く。お。ふ
 と。さ。ん。ゆ。か。き。ん。ゆ。あ。る。の。う。ん。ま。と。い。あ。く。ん。今。す。ゆ。ゆ。
 真の。親。と。ま。よ。う。う。あ。ま。す。い。の。か。う。う。気。陸。を。し。う。今。更
 何と。面目。ま。い。と。ひ。と。う。萎。ろ。く。世。の。業。の。朝。の。表。の
 ち。風。情。か。の。緞。の。結。の。色。と。と。う。あ。げ。良。小。わ。い
 あ。て。よ。く。と。流。形。う。う。表。よ。ん。の。音。る。ひ。い。と。回。答。て。証
 づ。ま。ぶ。列。人。る。ね。神。系。交。五。布。常。に。流。入。か。か。を
 き。よ。そ。の。瓦。次。を。由。後。ず。て。つ。つ。く。と。よ。う。来。る。か。ん。ん。

婿よあさこのお徳つとてが親父由をむす所と申す
 義親の挨拶して内お徳のきまひて居る是といふ
 のも目ごろう。信公まる林のかうげり。実ふこころん
 おまへのるを明らき忘まる障りあり。男と生れし名
 笑よハおんる女と連死て。誓しこるるべと人こそ出
 てハいそ縁らあくと公ひとらみあごうまこも。朝夕
 公やましくして。万端世作よるる人の女児と初ごとい
 をねてハ。義理由海むと公で公を。お申してハ居

まし。おひぐうとて鼻をさる牛の喉入やあひ
 けとと。親と親とをねんづつふ。たろくハゆあうと
 ちふあどろと。しそく。あゆもあゆもつるぞ。飲こぶ
 こころよ。いかにて。あまへの何中もむがなり。塞いである
 ハ。おのりね。婿のお徳さるおんと。こころが。患痛うん
 ちるるまいが。大てハ外まねとひごらうね。ト情を念
 洞のえ。岩本あうね。あまへのふも。かひて。思ひをかけ
 ちるも。かこ。親父母の主人とく。身を懐む。由女子のた

と。色け不きどもいせせざれどおのろちよ入こ焦ことつる
 男おとこ不しわくといひかけらと嬉うれしいにせとりいびなまりよいよ小
 言こともぬ身みのよ素す性じやう。このや家いえのよ素す子こと相譚あいや
 又また弟あにの妹の婚。そを今いまさらふるえと志しをあらう。さらえ焦
 ままく病ひの床とこ果たまへ世よるまき人ひとの救。いつともるど
 り志の人ひとと。裁さまく毒どくの殺りゆ。殺ころさらうるまき素す親しん
 の恩を仇とやるゆべきと。私わたしと狗とお壺はち。形かたち
 を信と改とあて。お世のよれも夜よのあるこの幼

るの私わたしふせいを。その中う不あらくとごさる。刀称なが唐
 あもごさいませらう。まして考えしを取の弾判た男おとこがう
 あり器量りやうあり。何不た足たるいよん刀か称な。僕わがをされる
 お身のう人ひとの中うまくい。女を中ちゆうとお配そいらうとも
 内うち房ぶどう子こ次つぎ身み。やごごらうま身みん。さらえ貴たかいのあり一中
 かまと志。十じゅうふつあんとうでも。け方かた不たかごいません
 私わたしのモウ一を良人ひといかるら。おのかうる人ゆも肌かわとあらね
 歎なげがけ。信しん免めんるさらまくとごさらうまり。しらをねて此方こゝへ拍

子ぬけかたを詞由陰うら。せうく忍ひ惚かうと。執りぶ
甲斐もろづ川。持舟の簪むねは。焚思。抜小あまる。夜慕
の雲。ふと又さうて。然らう。中あつて。夫又希い。かみ代が
侍人まるとより。ふ首染ととらうつ。髪をふくむ。目の内は
洞を浮めて。かみ代が。良は。つと。うち。保め。一。哀。一。糸。一。の
懐く。さ。懐へ。て。今。ま。ま。ハ。足。由。出。さ。ん。る。ま。も。見。せ。ね。い
と。う。う。が。武士の。意。地。か。く。る。う。う。人。の。恥。を。ま。ま。て。一。言。の。ひ。ひ。こ
る。が。あ。る。吾。で。い。あ。ら。う。が。耳。を。持。て。不。肖。と。あ。り。て。夢。て

下さき。かまを。忍ひ。初て。う。森。る。乃。由。日。す。と。ぬ。意。の
歎。死。よ。そ。い。ま。ぬ。縁。る。う。が。一。夜。の。涙。外。で。ゆ。と。果。敢
た。く。あ。く。べ。あ。ふ。不。ど。夫。由。指。由。た。ま。う。べ。ら。そ。今。目。の。い。を。ふ。ら
あ。す。明。日。の。い。を。ふ。と。あ。つ。て。見。て。ゆ。い。や。く。あ。が。人。間。才。一。の。情。と。と
よ。や。あ。ま。う。が。ゆ。か。し。て。親。兄。才。の。目。を。志。の。ひ。一。夜。二。粒。の
そ。い。外。よ。う。う。き。き。忍。ひ。を。晴。ま。と。も。あ。る。千。里。由。一。蹄。方。一
と。律。の。家。あ。る。ま。ば。あ。の。才。の。怨。ん。い。う。ら。保。と。意。一。持。人。は。服
かつた。痴。毒。の。よ。不。後。の。よ。と。人。は。指。き。笑。は。せ。て。その



二

十

義理と
り又字が
あへるる
まにイ
美小
浮世の
景勢



うくふまの死しよももるぬ中なかつふるるふるるのの必かならず定まむをを志こころををららく
塔たかののひひ猪いの俣ま文ぶん婦ふががれれよよへへくく表あらわををれれててのの婚む嫁よめととままり
とといいわわりりをを日ひびびうう。おおままのの親おやのの機き嫌きらををどどろろ。とといいううがが親
父ちち又また七しち小こもも。とといいふふがが猪いの俣まのの妻つまののあありりととおおししめめ。
特とくむむおおのの通とほ下くだててぬぬ。親おやとと親おやととおお改かへててままぐぐたたかからら親おやをを
縁えんぐぐ。おおははくくのの甲かみおおままのの年としららうう日ひどどろろのの身みのの親おやひ
ややしし物ものああららうう猪いの俣まももここまま。完かん尔にととももせせぬぬささららぬぬ。おおははくくよよら
もも行いかかのの妻つまににままるるへへききかかままのの法はふををささせせううとといいふふ。

今いまももよよ千せん々ぜん世せいのの心こころををととららぬぬ。仕しああげげてて親おやいいぬぬああの
池いけ今いまももおおままのの口くちにに猪いの俣ま。身み人ひとののああららぬぬ男おとこのの乳ちちをを一いつ生せいふふれ
ぬぬとといいひひるるささららぬぬ。そそままににまま赤あかみみののううららううどど。おおははくく又また定まめてて人ひと志
ままるる。おおははくくとといいふふ男おとこへへおお申まをすたたててのの改かへををはは親おや。そそんんにに
おおははくくとといいふふとといいふふとといいふふ。平ひらつつてておおれれ外ほかにに外ほかにに。二に世せいのの約やく束くわししとと
人ひとががああららうう。おおははくくとといいふふとといいふふとといいふふ。おおははくくとといいふふとといいふふ。おおははくくとといいふふとといいふふ。
焦ことといいふふとといいふふとといいふふ。おおははくくとといいふふとといいふふ。おおははくくとといいふふとといいふふ。
るる。おおははくくとといいふふとといいふふとといいふふ。おおははくくとといいふふとといいふふ。

多々。兩個ふたごぐらうまへてうきうきおれよ。アやめらハ
妹いもがむこ婿むこをちよちよと代よをとをとさけけむむへ。おあはらがあらうも
いとどうとと。狗いぬよあままてそままぬ自。おあままのこと
痛いたむらむらべい

郭公くわくこうの初編卷之中はつぺんくわんのちゆう 終

